

《優秀賞》

水と農業と共に

学校法人大阪医科薬科大学

高槻中学校

2年

清水

祐司

「水」。最初に僕に蘇ったのは、小学四年生の時の記憶だ。僕は当時、家から自転車で十分程度の小さな谷にある畑を借りて、根菜やトマトなど何種類もの野菜、時には僕の大好物のスイカやメロンなども栽培していた。そばには川が流れており、アマガエルやカマキリ、それを捕食するモズといった様々な生物がやってくる。この谷は、生態系のつながりを肌で感じられる、自由研究の調査地にもってこいの場所であった。特に野鳥が好きだった僕は、カメラに、畑へやってくる鳥たちの姿をのこしながら畑仕事を手伝っていた。普段僕は、母のどこか頼りない腰を少しでも労るべく草抜きに全力を尽くした。

ある晴れた初夏の朝、久しぶりに僕は野菜の水やりを任された。ホースから直接水を撒くのだが、野菜の根元付近のみを狙うのが難しい。根のない土ばかりの不要な地面にもかかって効率が悪い上、不要な水による根腐れや感染症のリスクもある。小学校の自由研究でSDGsについても触れていた僕は小学生なりにきつと、無駄なことをしていると感じただろう。畑周辺を歩いてみれば、いくつかの場所で用水路の漏水も見られた。

僕たちは水を大切に出来ているのだろうか。「地球表層の七割は水が占める」と言われてみれば、水なんていくらでもあるじゃないかと何となく感じてしまう。しかしこのうち、人間が使える淡水の割合は約一万分の一。現実には日本でも世界中でも頻繁に水不足が叫ばれ、そのたびに作物の不作など問題が起こっている。これは人間が、自然の限界を超えて水を乱用していることも理由の一つだと知った。そんな水を僕は、時に流しっぱなしにし、時に大規模に汚し、無責任に自然に返している。

日本では、淡水の六割以上を農業用水として使っている。畑で収穫したスイカもメロンも、水が恵んでくれたものだ。水の恵みを大切に、そして正しい形で受け取ることで初めて僕たちの豊かな生活が成り立って

いる。逆に、過度な水の使用で他の地域での水不足、作物の病気や根腐れ、肥料成分の流出や地下からの塩分による環境汚染などの問題が発生し、コストの増大にも関わる恐れがある。

漏れ出した水を、我先にと浴びにくるカエル達。今まで微笑ましく見ていたはずの彼らの姿に、今日はどこか背筋に冷たいものが走った。身勝手に水資源を用いた先にある、水不足に陥った自分たちの未来を、暗示しているような気がした。

農業における不必要な水の量を減らし、将来も水の恩恵を受け続けられるようにするためには何が必要なのか。それは、「節水」だと思う。作物に必要な分だけの水を、適切な場所に撒く。少し難しいように思えるかも知れないが、それを実現してくれると期待できる強い味方を僕ら人間は持っていた。それこそテクノロジーだ。例えば点滴灌漑と呼ばれる農業技術。これは必要とする根元へ、ホースやチューブの小さな穴から点滴のように水、養分を供給する。水のロスが極端に少なく、水の不足した地域でも栽培可能。また、土壌センサーや気象センサーという土壌の水分量や温度、風向などを測定できるものもある。これらを用いることで作物の品質向上による生産コスト削減や人手不足の解消、水を含む塩分による作物の生育不良の軽減を図れる。これらには多額の初期コスト、農業に関する知識やメンテナンスが必要となる。国などの補助金も不可欠と言えるだろう。もちろん限りある水を手く使い続けるためには僕たちの努力もなくてはならない。そこで僕は、農家の方々や大切な水に感謝の思いを持ち、農業を学ぶ時間を作って知識を蓄えたり、ふるさと納税を通じて農業に力を入れる自治体に寄付をしたりと、間接的であっても身近なところから節水に協力していきたいと考える。